

ことばの 学び

三省堂 国語教育
a new way
of learning
Japanese



平成18年度版
『現代の国語』『現代の書写』
教科書特集号Ⅳ

ワンテーマ誌上交信 「学びとデザイン」
中洌正堯 中垣信夫

特集

学びを生み出す
「カリキュラム開発」と「評価」

vol.

11

④ テキストからプログラムへ



①

教科書から
ひろがる学び

②

対話する
教科書

③

新しい学びの
サイクル

与えられ、固定化した「テキスト」としての教科書ではなく、
学び手の学習環境や興味・関心に応じて、弾力的な学習活動が実現できる
「プログラム」の一部としての教科書を提案していきたい。
…三省堂『現代の国語』『現代の書写』は、そんな教科書をめざします。

平成18年度版
『現代の書写』



平成18年度版
『現代の国語』



(イラスト：たむらしげる)

平成18年度版
『現代の国語』
『現代の書写』
教科書特集号
IV

ことばの 学び

三省堂 国語教育
a new way
of learning
Japanese

vol. 11

CONTENTS

+表紙イラスト
藤川亜矢
+デザイン
石川愛子
+DTP制作
田頭ひろみ

●ワンテーマ誌上交信

「**学びとデザイン**」 中冽正堯 中垣信夫 …………… 2

●特集

学びを生み出す

「カリキュラム開発」と「評価」

カリキュラム開発と評価 尾木 和英 …………… 4

学び手のためのカリキュラムづくりと評価 三浦 修一 …… 6

基礎学力を保障するカリキュラム 佐藤 佐敏 …………… 8

国語科における創造と情報活用 井上 雅登 …………… 9

学習者の学びの履歴としてのカリキュラム開発

河野 順子 …………… 10

四つの評価 村井 万里子 …………… 11

平成18年度版『現代の国語』『現代の書写』

「言語事項」学習材の系列 …………… 12

「カリキュラム開発」と「評価」への理解を深めるために

…………… 14

●教室で読む 4

読むことの学習とさまざまな表現の可能性

松友 一雄 …………… 16

●ちょっと気になるカタカナ語 4

「ミッション」「メディア・ミックス」

「コンピテンス」「ダイアログ」…………… 20

●平成18年度版『現代の国語』『現代の書写』 SNP

評価資料 …………… 22

●学びを開く 一北から南から— 4

体系は大事だが…

矢内 忠 …………… 24

●読み語りの出前 4

「新しい修正点が見つかる」著者との読み語り

後路 好章 …………… 25

学びとデザイン

自分のためにことばの実感的な 学びをデザインする

「デザイン」には、設計(図)、図案、意匠などの意がある。「意匠」の意を追っていくと、「買う人の注意を引くためにする、製品や美術工芸品などの形・色・模様などについての新しい考案」のほかに、「趣向。物事を実行したり作ったりする上のおもしろい(変わった)アイデア」という説明に至る(『新明解国語辞典』第六版による)。

ことばの明示性と含意性を考えると、前者の「新しい考案」のほうはより明示性が強く、「デザイン」のもともとの意にそっている。後者の「おもしろいアイデア」のほうは、より含意性に富み、比喩的表現に移っていき、そこそこの文脈上の意味をひきおこす。

この後者の用語を「学び」と結んだ提言がある。提言のキーワードは「第一次のデザイン」(注)というものである。

授業を生き生きとしたものにするためには、授業過程の初めの部分である第一次の構想や準備がきわめて重要であることを主張している。

例えば、読みの授業では、児童・生徒に「読みの観点づくり」をさせる。

その際、児童・生徒の生活の文脈(実感的な学びの文脈)をしつかり引き出すことである。このような授業過程の初発における工夫を、「第一次のデザイン」と名づけたものである。

この考え方を、主体

的なことばの学びの全局に広げるとき、児童・生徒が自己協働のうちに進めることばの生活(ことばの実感的な学び)の自らのデザインが期待される。学ぶのは誰のためでもない、自分のためであり、やがては、その自分を必要とする他者との共生のためである。自分のために、ことばの実感的な学びをデザインする。のであれば、そのデザインは、「物事を実行したり作ったりする上のおもしろい(変わった)アイデア」にするほうが楽しい。

「勉強」という古い殻を脱いで、ことばの実感的な学びのために、アイデアを出し合おう。そのアイデアによれば、ことばのどんな力がつくかを考えよう。そして、いいアイデアは共有し、実践しよう。

中 刈 正 堯

〔なかつ まさたか〕兵庫教育大学名誉教授。『現代の国語』編集主幹。国語教育探究の会・国語論究の会代表。『国語教育における「歳時記的方法」「風土記的方法」』を探究。



(注) 河野順子(2002)「説明的文章の学習指導における〈他者〉と出会う第一次のデザイン」(『教育実践学論集3号』兵教大大学院連合学校教育学研究所編 所収) 参照。



中垣 信夫

〔なかがき のぶお〕グラフィック・デザイナー。杉浦康平デザイン事務所を経て、中垣デザイン事務所主宰。現在はブックデザインを主に手掛ける。『現代の国語』『現代の書写』、平凡社事典類、美術手帖など。

世界各国の子どもたちが使う教科書を見ると、その国の素顔が浮き彫りになります。学びが自然に生まれていくような教科書からは、その国の豊かな文化と、その背景をうかがい知ることができるとは思います。そのような教科書を使って学び、育つ子どもたちは、きっと豊かな感性を身につけていくことでしょう。だからこそ「教科書をつくる(デザインする)」という作業は、子どもたちの未来を切り拓くという、とても大切に重要な仕事であると感じます。

『現代の国語』をはじめとした教科書をデザインするとき、私は常にその文章が呼吸し、生きているようなイメージを大切に作業するよう心がけています。教科書は言語(ことば)を中心に構成されています。その言語を読み手に

明確に伝えるためには、文体のリズムに合わせて一行の適切な長さや書体、文字の大きさなどを決めていく必要があります。一行が極端に長すぎたり短すぎたりしては、読み手が非常に息苦しく感じ

てしまいます。俳句や短歌において、その文字数が決められているのは、読み手がひとつひとつのことばを、息を吸い・吐き・詠みあげる、その呼吸のリズムが周到に計算された結果であると考えています。こうして、読みやすい文字詰めを考えると同時に、行間にも気持ちのよいアキを作ることによって、静止した本文が語り出し、読み手の視線の自然な流れを促します。

さらにイラストや写真などの図版もイメージを豊かに広げていく要素として大事なものですので、それらも吟味したうえで配置していきます。『現代の国語』においては、色使いも、三学年によって色分けするなど、本全体としての統一感をもたせています。そうして筆者の明晰な文章と明快なデザインがひとつひとつになって読み手に伝わると、互いの呼吸がびつたりと合うような深い共感を生み出します。

新しい季節を迎え、日本の子どもたちがドキドキしながら新しい教科書を開き、毎日楽しく学べるよう、そして人との関係の中で日本語を身につけ、将来自ら豊かな文化を築いていけるよう祈っています。

明晰な文章と明快なデザインが
ひとつになって読み手に伝わる

学びを生み出す

「カリキュラム開発」と「評価」

指導者としての創意・工夫を生かした「カリキュラム開発」と「評価」が、
いま強く問われています。

平成18年度版『現代の国語』は、SNP(サポート・ネットワーク・プログラム)とともに
実態に応じた「カリキュラム開発」と「評価」をサポートしています。

カリキュラム開発と評価 —— パラダイム転換をめざす

ILEC言語教育文化
研究所代表理事

尾木和英

1 なぜカリキュラム 開発か

「なぜ」というこの問いかけには二つの意味がある。一つは、用語の使用についてであり、ほかの一つは、この時期に「カリキュラム開発」に注目したかについてである。

まず用語について一般的にいうと、カリキュラムという語は、ほぼ教育課程と同じ意味に用いられている。教育事典によつては、「カリキュラム→教育課程」としているものもある。しかし用例を分析してみると、まったく同一というわけではない。教育課程が授業時数との関連における指導内容の組織を前提とするのに対し、カリキュラムは当面する課題への対応などを織り込み、教科・領域等の扱いの弾力化、学習形態の工夫や教育ボランティアとの協力指導などを視野に入れ、教育計画をダイナミックにとらえている。本稿においても、国語

2 カリキュラム開発 の重要性

科が直面する課題を見据え、単なる教育計画の改善・充実ではなく、指導展開の見直し、学習活動組織の改善、教材・学習材の開発などを含む意味の用語として「カリキュラム開発」を用いることとしたい。

次に、なぜ今「カリキュラム開発」を取り上げるかという問題である。

二〇〇四年十二月七日付けの『朝日新聞』夕刊は、これまでトップレベルだった我が国十五歳の子どもの読解力が、平均レベルに低下したというPISA(OECD生徒の学習到達度調査)二〇〇三年調査の結果を大きく報道した。さらに九日には朝刊の社説において、「何が書かれているか。文章が理解できなければ数学の問題も解けないし、科学もちんぷんかんぷんだ。本や新聞を読むのもおっくうになり、私たちが生

きる社会や世界に対する興味と理解も限られたものになることだろう。」として国語力に関する危機感を示した。

この調査で読解力とは「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」とされている。ここで振り返ってみたいのが、現在の国語科の授業である。「理解し、利用し」までは、多くの教室で学習活動に組み込まれているとして、「熟考する能力」について、はたしてどれくらいの教室でこれをねらいとする授業を展開しているだろうか。熟考する能力を育てるためには、どのような学習材を用い、どのような活動を組織し、どこにどう創意工夫を生かすか、そのようなことがどれだけ教育計画において配慮されてきただろうか。

3 求められる国語科の指導改善

文化審議会国語分科会は二〇〇三年一月に、「これからの時代に求められる国語力について」という表題を掲げ、審議経過の概要を公表した。

ここでは、今こそ国語の果たす役割と国語の重要性について確認することが大切であると、学校教育に関しては「国語力

はあらゆる教科の基盤であるので、「考える力」や「感じる力」、「想像する力」、「表す力」、「国語の知識等」といった国語力の中核をなす事項をしつかりと意識しながら、学校教育全般のあり方について検討していくことも重要である」と述べている。

このような状況の中、カリキュラムや評価についてのパラダイムの転換が望まれている。国語科の指導改善を中心とする、国語力育成を重視するカリキュラム開発が、ここに求められている。

教育課程の編成に際して、国語科としても、直面する課題が何で、自校の学習者にどのようなことばの力をつけようとしているのかを明確にする。そして、評価を適切に位置づけることによって実効を高めることが当面の課題となっているのである。

4 効果的な評価と説明責任

自主・自律の時代の学校は、どのように教育の成果を上げるかについて責任を負っている。したがって、国語科の学習指導としても、目指すところ、その実現のためにどのような取り組みを進めるのかを明示し、創意工夫によって目標実現を目指すことが重要になっている。

PISA調査結果の報道にも見られるよ

うに、ここ数年、確かな学力の育成が問われ、学校の負うべき責任の中心に位置するようになってきている。そこでは、確かな学力を保障することは学校の責務としてとらえられ、目標の実現状況の確かな評価に立ち、教育成果について保護者や地域の人々に説明し信頼を得ることが必要になっている。

そこで注目されるのが教科の学習評価であり、そのフィードバックである。

授業の開始にあたって、これから展開する学習に対する学力、学習経験、関心・意欲などの実態を把握する診断的な評価を位置づける。指導の過程では、学習者がどのようにことばの力を身につけ、どのようなことばの学びに意欲を向けているか、指導の効果に関する評価を行う。

さらに、評価結果を指導者として次の指導に生かす。学習主体である学習者、ともに指導にあたる保護者にこれをフィードバックし、その協力を得ながら、日々の授業の改善充実、当面する課題に対応するカリキュラム開発を進めることを提言したい。



【おぎ かずあき】公立学校教諭、東京都教育委員会指導主事、東京女子体育大学教授等を経て、現在はILEC言語教育文化研究所代表理事。当面する課題に対応する指導改善に取り組んでいる。著者に『国語科授業改善十二章』（三省堂）などがある。

学び手のための

カリキュラムづくりと評価

「年間計画を作成する」とは

三浦修一

横浜市立原中学校

1 「カリキュラムを 作成する」ために

四月。新しい学年の授業がスタートする前に、今年一年の授業の計画を立てる。「年間計画」と言われるものである。どの学校でも当然のように行われているが、この「年度始めの計画・立案」に、実は次のような大きな課題が潜んでいる。

課題一 何のために年間計画を立てるか

確になっているだろうか？

課題二 その年度の学習者の状況を把握し

たうえで立てられた計画だろうか？

課題三 いつでも、誰に対しても、その計

画の進行状況が説明できるように、内容を把握しているだろうか？

それぞれの課題について、学校としてだけでなく、教科を担当するすべての指導者が答えられるように、準備を進めておきたい。それが、教科指導についての説明責任を果たすことにつながるからである。

課題一については、当然「今年一年間の授業を行うための計画だ」ということになるが、そこで改めて確かめておきたいのである。それは、「何を根拠に立てた計画か」ということである。

「教科書に載っている学習材をその順番

通りに進めるのだから、何でそんなことを考える必要があるのだ」という立場に立っている限り、この問いは愚問にしか感じられないだろう。

そしてこの問いかけは、次の課題二と密接にかかわる問題である。

新学期。これから始まる国語科の教室で出会う学習者の様子は、想像はできて実態は不明である。これまでの学習の履歴はみな異なっている。そこで獲得してきた「学力」についても、それなりの幅があることは、経験上明らかである。そのような学習者が集まって学習集団を形づくっているのである。

具体的には、例えば「教科書で最初に出会う学習材を、正しく読めるか」また、その続きとして「思うことを書かせたら、どの程度の時間で、どれ位の分量の文章を書けるか」というようなレベルで、学習集団の学力を把握しているかという問題である。

だからこそ、最初の課題に戻って、改めて「年間計画を立てる」ことの意味を確かめたいのである。

この「年間計画」は、これまでは「指導計画」であった。すなわち教室で授業をする指導者が、授業をどう行うかという目的で立てた計画であった。そこで想定した学

習者の姿は平均的な姿であったとしても、実態とは異なっているのではないだろうか。たとえ異なっていたとしても、「今年の生徒は出来が良い、悪い」といった一般的な物言いで片付けてこなかっただろうか。

授業を行う責任は重い。学び手である学習者に「確かにこういう力が身についた」と言える国語の力をつけさせる責任を私たち国語科教師が負っているからである。

したがって、年間の計画とは、「学び手である学習者が、確かに国語の力を身につけるための学習計画」でなければならぬ。そのためには、学習集団についての診断的な評価が必要である。三領域と言語事項のそれぞれに関して、出発点として、学習者がどのようなことばの力をもっているのか（いないのか）を、また、どの程度の意欲を持っているのかを、さまざまな方法で確かめることから、「学習する生徒のための計画」を作成することが始まるのである。

2 具体的な手順のために

このように考えてくると、年間計画を作成する上で考慮しなければならない事柄が明確になってくる。

まず、教科書の学習材の配列は一応の基準とはなるが、それは学習者の実態とは必ずしも一致していない。そこで、目の前にいる学習者に合わせて学習の順序を組み替えることも考慮するのがよいだろう。

次に、どの領域の学習であれ、学習するための授業としての必然性から、一つの学習材では、一つの目標について学習を進めることである。明らかに総合的なまたは関連した内容を含む学習材以外では、複数の領域にまたがる学習を行わせないほうがよい。

さらに、学習材を取り上げる順序と、それぞれの学習材についての学習内容を決めることと並行して、「領域ごとの計画」という視点をあわせてもつということが求められることを忘れないようにしたい。三領域の学習が、全体として偏りなく行われることが必要だからである。

これらの事柄についての確認が行われた後に、評価についての計画を作成したい。「年間学習指導計画」は、「評価計画」でもあるからである。

それぞれの学習材ごとに、学習の中心となる言語活動が行われる。その言語活動を評価するための計画である。

ここではまず、「この学習材は何を目標として学習が行われるか」を、学び手であ

る学習者に示すことから、計画作成が始まる。その目標とする学習活動がどのような状況になったら規準を満たしていると言えるのかを、明らかにするためである。評価する指導者が、評価規準が揺れることがないように、また、恣意的な評価とならない評価をするための準備である。

そのためには、評価の「場面」と評価の「方法」も確かなものとしておくことが必要である。感覚的な評価方法ではなく、評価の対象としての発言や行動、記述などを観察したり分析したりするなど、評価活動全体についての明確な見通しをもつことにより、確かな指導計画が作成できることになるからである。

国語科の授業は、「ことばの学び」の入り口である。そこから始まる学びが、確かなものとなり、豊かなものとなるように、さらには学習する意欲が高まるように、しっかりとした構えを私たち国語科教師はもっていたい。そのための「計画」なのである。



【みうらしゅういち】
「学校を変えよう・学校が変わろう」を合言葉に、生徒が主体的に学ぶ学校にするのはどうしたらよいのかということ、この二年間、学校として取り組んできました。

基礎学力を保障 するカリキュラム

学力低下が叫ばれている。

学力低下が論じられるとき、学力は基礎学力としての知識や理解を指す文脈で使われている。国語においては、言語事項の知識理解といったところを指すと認識している人も多い。そして、国語の授業時数も減ったことから私たち現場の指導者も、学習者の学力が低下していないかと心配している。

本校では、今年度から、朝テストを毎日十分、同じ時間帯で実施することとなった（カリキュラム化し、授業時数に換算する）。「目に見える学力」をつけてほしいという保護者からのニーズが大きいためである。週五日であるから、この時間帯を五教科で分割するとして、国語は週一回・十分程度、

毎週「目に見える学力」をつけるための時間を確保するわけである。保護者のニーズがなくとも、同様のプランを模索している学校は、きっと多いにちがいない。

このような中で、『現代の国語』は、学力向上に資する教科書となっているのだろうか。「目に見える学力」が身につく教科書となっているのだろうか。

この視点から、鳥瞰してみると、実は、本校の朝の十分学習のプランの実現にも、この『現代の国語』が、大きく役立つことがわかる。例えば次の三点である。

一 文法では、興味関心を引くリードにあたる「文法の窓」を授業で行った後、教科書後半にまとまっている「文法のまとめ」で説明し、朝の十分テストで、「やってみよう」の問題を出題することで、理解の定着を確認することができる。

二 「しくみから学ぶ漢字」も後半部にまとめられており、一回の朝テストで「しくみから学ぶ漢字②」を範囲とします。」と区切って提示しやすくしている。

三 資料編にある「手紙の形式」を学習した後、封筒の書き方を朝の十分テストで確認することも可能である。

このように、「資料編」も含めて二層化して構成されているこの『現代の国語』は、学力低下が叫ばれている今、まさに有効に使える教科書に編集されている。思考力を



2年「文法の窓」(右上)「文法のひろば」(中央・左)導入としての「文法の窓」では、日常のことばをきっかけに言語のしくみに気づく。「文法のひろば」では、簡潔な解説と問題により、知識の定着と活用をめざす。

鍛えながら、基礎学力の定着も図れるのである。また、「読むこと」「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習材からワークシヨップまで学習者の興味関心を引き出す魅力的な学習材が並んでいる。事実、一つの学習を実践していくと、楽しい国語教室になるように教科書ができています。

今回は「学力低下」の窓口からカリキュラム開発を述べたが、学習者の実態に応じながら、私自身も魅力的な学習材を有効に利用するカリキュラム開発も進めていきたい。

佐藤 佐敏

新潟大学附属新潟中学校



【さとう さとし】最近は、「マイクロパネルディスカッション」や「ラジオCMづくり」といった「話すこと 聞くこと」単元の開発をしている。

国語科における 創造と情報活用

国語科でとらえる「創造」

本校では、平成十三年度から十五年度にかけて、「創造を支える情報活用の力」を全教科・全領域にわたる新しい学校づくりのキーワードとして推進してきた。以下、国語科におけるカリキュラム開発について述べていくこととする。

情報とは、学習者が価値のあるものとして受信したものであり、「情報」としての価値が学習者自身の中に立ち上がって初めて情報と言える。さらに国語科でいう情報とは、主としてことばやことばの周辺にあつてコミュニケーションを支えるものの中に在し、「情報」として取り上げられることで、思考や表現を創造的に成立させる働きを持つ

ものである。そして、国語科において創造とは、ことばとことば、ことばに内在する情報の結びつけをおして、学習者自身にとつての意味や新しいアイデアや表現などを生成させる過程で行われることであると考えられる。

「創造を支える情報活用」を取り入れる

創造的な思考力・想像力は、一つには手持ちの情報と情報、そして新しく手に入れた情報をどのように関連づけ、つないでいくかというところから生まれてくる。これまで、言語表現を読み、味わっていく過程の中で、意識的にことば同士を関連づけたり、つないだり結んだりして自分なりの意味・イメージを創造していく学習の開発をするべく努めてきたのである。

国語科における「表現」は「書く・話す」という文字・音声言語が中心である。しかし、映像や画像を組み合わせた効果的な表現の工夫が社会一般でなされている現代においては、表現方法を組み合わせ、適切で効果的な表現を考え実行していく必要がある。そのためには、ぜひとも映像や画像を取り扱う授業を展開していくことで、学習者自身に発信者の立場に立つてもらい、情報を自らの価値観によって選択し、再構成させるという活動をさせたい。

『現代の国語』では各学年に〈ワークショップ

ップ〉を配置している。これは、学習者がグループ単位で共同編集・制作を考えることのできる内容であり、活動を通して、「話す・聞く」「書く」「読む」の総合的な国語の力を使って学習を進めていくというものである。もちろん、これは学習者の生活の場に応じたものとなっており、いずれも興味関心の高まるものとなっている。一年「学校案内パンフレットをつくらう」を例にとるならば、指導者としては、「どのような記事が読み手に喜ばれるのか、どのような写真を使うと内容が引き立つのか」というような相手意識を学習者にもたせてパンフレット完成に近づけるようにし「しりたい」と考えるのであるが、このような留意点も、学習者が教科書を読むことで自然と身につけ、活動できるようにできている。

今後においては、『現代の国語』の〈ワークショップ〉をはじめとした様々な学習材を参考にしながら、本校のカリキュラム開発を進めていきたいと考えている。

井上 雅登

お茶の水女子大学附属中学校



【いのうえ まさと】お茶の水女子大学附属中学校教諭。現在の興味関心は「読書の効用」。生徒には機会のあるごとに読書を勧めている。



1年「ワークショップ 学校案内パンフレットをつくらう」
主体的かつ総合的な言語表現活動の場。コミュニケーションを中心とした協働作業の中でことばの力を生かす。

学習者の学びの履歴と してのカリキュラム開発 —文学の読みを中心に—

学習者の側から学びを捉え直す

学習者の学ぶ意欲と学ぶ力を育てるためには、どうしたらよいのだろうか？ ここでは、文学的文章の読みを例にして考えてみたい。

「国語科は指導内容が曖昧であり、何を教えたらいかがわからない」という現場の声をよく耳にする。この問題については、次のような三分法（注）が参考になる。

- ①教材内容：教材に書かれてあること（筋・人物・事件・など）。
- ②教科内容：国語科固有の知識や技術。どの作品にも広く使えるような文学の読み方。
- ③教育内容：国語科という教科を超えた内容。

河野順子

熊本大学



【かわの じゅんこ】小・中学校の現場経験を経て、現在、熊本大学教育学部助教授。主な著者に『学びを紡ぐ共同体としての国語教室』（明治図書）などがある。

容。文化的・価値的側面も含む。

国語科の指導では、②の「教科内容」が中心になる。が、学ぶ意欲と力を育てるためには、さらに、学習者の側から捉え直すが必要になる。これが、学びの履歴としてのカリキュラム開発につながる。

読み方の習熟を図る

『現代の国語』一年の「竜」、「アイスキャンデー売り」、「空中ブランコ乗りのキキ」の三作品を対象に考えてみたい。これらを通して教えるべき教科内容は何であろうか。

「竜」では、人物の心情や性格を読み取る際、言動を表す描写に注目する。

このことが「アイスキャンデー売り」の人物の心情や性格を読み取る力につながっていく。また、「竜」で、擬声語・擬態語や比喩表現に注目することによって、三太郎の心情や性格や生き方を読み取る。そこで学んだ比喩表現の読み取り方は、「空中ブランコ乗りのキキ」でも生きて働き、象徴を読み取る力へと高まっていく。

このように、指導者側からだけでなく、学習者の学びの履歴としてのカリキュラム開発という立場においても、「現代の国語」は、どの学習材でどういう読み方を教えるべきかを精選できるように、配列されている。

単元	主題	内容
1	竜	竜の登場、竜の心算、竜の心算の読み取り、竜の心算の読み取りの練習、竜の心算の読み取りの練習、竜の心算の読み取りの練習
2	アイスキャンデー売り	アイスキャンデー売りの登場、アイスキャンデー売りの心算、アイスキャンデー売りの心算の読み取り、アイスキャンデー売りの心算の読み取りの練習、アイスキャンデー売りの心算の読み取りの練習、アイスキャンデー売りの心算の読み取りの練習
3	空中ブランコ乗りのキキ	空中ブランコ乗りの登場、空中ブランコ乗りの心算、空中ブランコ乗りの心算の読み取り、空中ブランコ乗りの心算の読み取りの練習、空中ブランコ乗りの心算の読み取りの練習、空中ブランコ乗りの心算の読み取りの練習

1年「この教科書で学びたいこと」

各学習材におけるねらいを領域・ジャンル別の一覧で示すことにより、学習者が主体的に「見通し」をもって学習に取り組める。また、ねらいに対応して設けたメモ欄は学習の「振り返り」活動にも活用できる。

その上で、指導者は、そうした教科内容が学習者の学びの履歴（学習内容）として残っていくようにするのである。例えば、人物の心情を読み取るにはどの読み方（ツール）をどのように使用すればよいかという「方略」が学習者に内面化されるような学びの経験をさせて、文学作品の読み取り方の習得・習熟を図っていくのである。

こうした営みが三年間積み重なったとき、学習者の学ぶ意欲が増し、読み取る力が身についていくことになるのではないだろうか。

（注）鶴田清司（二九九九）『文学教材の読解主義を超える』明治図書

四つの評価

評価の種類と目的

「評価」には、目的から見て次の四つの種類がある。

- ① 指導（方法）としての評価
- ② 指導計画と指導内容の改善のための評価
- ③ 説明責任を果たすデータとしての評価
- ④ 評定・選抜・集団編成のための評価

「評価」ということばを聞いたとき、一般的に最もイメージされやすいのが④である。④を保護者や子どもに納得させるために、③のデータ性が必要であると考えられている。②は戦後単元学習が導入されたとき、とりわけ強調されたのであるが、教科書の縛りが強くなるにつれ、ほとんど出番のない「評価」になってしまった。多くの

村井万里子

鳴門教育大学



【むらい まりこ】鳴門教育大学助教授。小中学生の文章表現の発達の魅力的な研究をしています。大学生との勉強は、読書の魅力と作文分析法を課題としています。

教師が、本格的な②の評価を自覚しないまま日々を過ごしていることは今日珍しくない。けれども、私が評価に関心している最も危機意識を抱いているのは、①の「指導方法としての評価」の重要性が見失われているように思えることである。

「教育（指導）」にとって、「評価」は「他の何か」のためにあるのではない。「評価」は「教育（指導）」の本体である。この「評価」即「指導」、という不転の腹の据え方の上に、評価の勉強に取りかかることが何より重要であると痛切に思う。これは、大学で出会う教師の卵（学生）たちが、甘いほめ言葉の甘さに甘く、叱る言葉やとがめる言葉にひどくおびえる様子を見るたびに、噴き出してくる思いである。

書く行為・作文の評価

「総合的学習の時間」が導入されたとき、どう「評価」するかが問題になったのは、紙の上の客観テストとは異なる「活動・行為（パフォーマンス）」評価の困難に多くの人が気づいたからである。これは「評価」こそ指導そのものである、ということに気づくための得がたい機会であった。

「聞く」「話す」「読む」「書く」行為の評価は、すべて「パフォーマンス（行為）評価」である。中でも最も基礎的な「パフォーマンス評価」は、「書くこと・作文」の

評価であろう。作品としての作文を、形式的な、あるいは表面的な内容の良さから評価するのでなく、作品を通して「書き手」の「書く行為」そのものの質と充実度を評価する。それが「行為評価」の基本となる。

「評価規準・基準」の問題

文部科学省の指示で全国に吹き荒れた「評価規準・基準」作成の嵐は、その後どうなっただろうか。「ひととおりで作ってほっと安心」、「実はあまり役に立たない」というのが教えながらの実感、という声を聞くことが私の周りでは多い。

この「評価規準・基準」は「パフォーマンス評価」のためにある。このことに気づいたら、直ちに「書くこと・作文」の評価規準・基準（ルーブリック）の策定に協働して取りかかるべきである。単元、学期、年間、小・中・高の各校種段階から、それぞれにまたがる長期間に至るまで、「長期スパンの規準・基準（ルーブリック）」はまず「書くこと・作文」でこそ可能である。これが完成したとき、冒頭に掲げた①②③④四つの評価が、有機的な一体のものであることに、多くの人が容易に気づくであろう。この基本が据われれば、「書く」から「読む」「聞く・話す」行為へと、評価の射程は自然に伸びていくに違いない。

言語事項

学習材の系列

平成18年度版
『現代の国語』
『現代の書写』
教科書持番号
IV

学びを生み出す
「カリキュラム開発」と「評価」

- 『現代の国語』『現代の書写』は、言語事項の学びを「教える・覚える」ものとしてではなく、次のようにとらえています。
- ① ことばにもぎまりやしくみがあることに気づく。
 - ② 考えたり話し合ったりする活動を通して、きまりやしくみを「発見」していく。
 - ③ 日常の言語生活を振り返るための手がかりとする。
 - ④ 国語科の学習や他教科の学習に役立つ知識や技能を育てる。
 - ⑤ 学習への関心・意欲と論理的な思考力をはぐくむ。

『現代の国語』

3年 2年 1年

『現代の書写』

<p>漢字</p> <p>1 字体・画数・筆順</p> <p>2 部首</p> <p>3 漢字の成り立ち</p> <p>4 音と訓</p>	<p>漢字探検 → 「しくみから学ぶ漢字」</p> <p>1 熟語の構成</p> <p>2 熟語の意味</p> <p>3 熟語の読み</p> <p>1 形・意味と読み</p> <p>2 三字・四字熟語</p>	<p>水／地／動作／自然／食</p> <p>音楽・芸能／住／衣</p> <p>性質と様子／ことば／交通／植物</p> <p>生活／スポーツ／感情／動作</p>	<p>漢字・語彙</p> <p>語句・語彙</p> <p>話・文章・文</p> <p>単語</p> <p>音声</p> <p>言語生活</p>
<p>◇情報ライブラリー</p> <p>1年 「国語辞典」「漢和辞典」</p> <p>2年 「ことばの辞典」「漢文の基礎」</p> <p>3年 「生活と辞典・事典」「文法の総まとめ」</p>			

1年	<p>一 さあ始めよう</p>	<p>筆記具・ 執筆・姿勢</p>
	<p>二 ていねいに書こう</p>	<p>楷書</p>
	<p>三 かなを交えて書こう</p>	<p>楷書に 調和したかな</p>
		<p>配列・配置</p>
		<p>行書</p>
		<p>行書に 調和したかな</p>

「ことば発見」	「文法の窓」→「文法のひろば」	「グルー
<p>2 慣用句</p> <p>1 多義語</p> <p>3 類義語と対義語の意味と用法</p> <p>1 和語・漢語・外来語</p> <p>5 辞書的な意味と文脈上の意味</p>		
<p>3 接続する語句</p> <p>2 指示する語句</p> <p>1 擬声語と擬態語</p>	<p>2 たしかな表現のために</p> <p>1 助詞・助動詞</p> <p>2 副詞・連体詞・接続詞・感動詞</p> <p>1 動詞・形容詞・形容動詞</p> <p>3 単語のいろいろ</p> <p>2 文の組み立て</p> <p>1 ことばのまとめ</p> <p>4 名詞</p>	<p>人間関係／思考／心理／性格</p> <p>経済／評価／動作／社会／環境</p>
<p>3 敬語</p> <p>4 方言と共通語</p> <p>2 日本語の音節</p> <p>4 話してはなと書きはな</p>		

2・3年		
<p>書き初め</p> <p>生活に生かそう</p> <p>三 全体を整えて書こう</p>	<p>一 はじめに確認しよう</p> <p>二 行書を使いこなそう</p>	<p>書き初め</p> <p>五 学習のまとめ</p> <p>四 漢字を速く書こう</p>

を深めるために

- Ⓐ＝基礎的な理論を学びたいときに
Ⓑ＝広く関連情報を得たいときに
Ⓒ＝指導改善のヒントがほしいときに
*定価は2005年4月現在のもの(税込)です。

『現代の国語』編集委員会



高階玲治

『今日から始める実践課題の
基礎・基本 No.6
今日から始める「確かな学力」
指導の基礎・基本』

(教育開発研究所 2,500円 2004年)



高木展郎

『ことばの学びと評価
国語科授業への視角』

(三省堂 2,100円 2003年)

学習指導に関する課題と カリキュラム開発のヒントを 得られる

Ⓑ Ⓒ

ここが魅力

基礎基本のとらえ方、思考力・問題解決能力、個に応じる指導などが平易に述べられ、効果的なカリキュラム開発をどう進めるかが理解できる本。

内容紹介

学力向上に関する指導計画から工夫の生かし方まで、貴重な示唆を与えてくれる本です。

当面の課題の把握、課題対応をどう実際の指導に結びつけるか、指導改善をこどもの意欲的活動と結びつけるための理論と方法がここにあります。

本書の中心となる課題の基本解明と実際の指導へのアドバイスは、次のように構成されています。

1章 確かな学力形成をどう考えるか

確かな学力のとらえ方、学習指導の重点、総合・選択のとらえ方、学力評価の考え方が明らかにされています。

2章 確かな学力の諸能力をどう形成するか

学習改善の中心になる基礎基本の定着、知識技能の形成、学ぶ意欲の形成を中心に記述されます。

3章 確かな学力指導にどう取り組むか

教育課程の編成、わかる授業、個に応ずる指導、問題解決的な学習活動の進め方などが具体的に示されます。モジュールを活用する指導、少人数・習熟度別指導の工夫に関する記述なども、実際の取り組みにヒントを与えてくれます。

4章 自ら学ぶ態度を育てる学習力の形成

指導改善の進め方が明示されます。

ことばの学びを中心に、総合的な 学習を含むカリキュラム開発の ヒントを得られる

Ⓑ Ⓒ

ここが魅力

授業改善の理論と実践の両面にわたる知識と取り組みの手がかりを得ることができます。ことばを大切にすると言語の力を備えた子どもの育成に取り組もうとする際の、テキストの役割を果たしてくれる本といえます。

内容紹介

「はじめに」では「学ぶということが、さまざまな要素のかかわりの中に存在するとき、そこでは、コミュニケーションが行われる。このコミュニケーションこそ、ことばを学ぶということに機能する学びの行為である。」と述べられます。ことばの学びの成立にはコミュニケーションという学びの場の成立が欠かせないという筆者の考えがここにあります。こうして、本書では、コミュニケーションという学びに力点が置かれ、具体的な指導改善の進め方が述べられることとなります。本書を貫くのは、どのように創意を生かした授業をつくりあげるかという問いかけです。

この課題意識のもと、カリキュラム構成のあり方、学びを活性化させる評価システムの実践が示されます。特に評価に関しては、その本来の機能からとらえられ、多面的・多角的な評価を目指すことが説かれます。

日々の指導改善に悩む先生方の立場に立って記述されていますので、読者の先生方にとって現実的な内容になっていることも、本書の魅力です。

平成18年度版
『現代の国語』
教科書特号
IV

「カリキュラム開発」と「評価」
学びを生み出す

「カリキュラム開発」「評価」への理解

参考図書のご紹介



B・S・ブルーム他
『教育評価法ハンドブック
—教科学習の形成的評価と
総括的評価』
(第一法規 現在品切れ中)



安彦忠彦
『新版カリキュラム研究入門』
(勁草書房 2,730円 1999年)

教育評価に関する 基礎的な理解を得られる

(A) (B)

ここが魅力

教育目標を分類的にとらえ、指導・学習の展開、評価の位置づけの、いわば原点が理解できます。

内容紹介

この本からカリキュラム作成と評価の位置づけに関して学ぶことによって、指導目標のとらえ方、学習指導の展開および評価とその工夫のとらえ方が広がり、奥行きが出るに違いありません。目標達成、効果的な指導の意味、指導改善に機能する評価の理解が深まり、指導の構想、カリキュラム策定への取り組みが意図的なものになるものと思われまます。

全体の主な内容は

I 教育と計画

学習過程の構成要素、教育目標群の設定、指導のねらいの完全習得を目指す学習の実際など。

II 教授過程における評価の利用

総括的評価、診断的評価、形成的評価に関する基本的な事柄、実際の取り組みの進め方、結果の利用など。

III 認知的、情意的教育目標に関する評価技法

知識・理解の目標、情意的目標に関する評価技法の実際、テストの問題と作成など。

IV 評価システム

の四つの章によって構成されています。

教育目標の分類学(タクソノミー)には異論もありませんが、基礎的な本として一読を勧めます。

カリキュラムに関する基礎的な 理解と開発のヒントを得られる

(B) (C)

ここが魅力

カリキュラムとはどういうものか、カリキュラム開発に何が求められるかが、多角的に、しかもわかりやすく述べられています。

内容紹介

私たちは、日ごろ漠然と、カリキュラムの構成要素、改善を支える内容などをとらえていて、それほど理論的、分析的には考えていません。指導にあたって、ときに学力向上という立場から効率化を意識し、当面する課題への対応から特色ある計画の立案を行うことはあります。しかし、これを厳密にとらえて指導に位置づけるまでには、いたっていないのではないのでしょうか。

本書では、この点を意識して、カリキュラム研究の歴史、理論的前提などをふまえ、当面する課題への対応、教科における開発の重点、学習者の発達の視点などを明らかにしています。

例えば、情報教育のカリキュラムに関しては、①情報活用能力の基本理解、②イギリスにおけるカリキュラム開発、③わが国におけるカリキュラム、④小・中・高等学校の情報教育について述べられます。多角的な情報が与えられることによって、当面する課題、実際の指導に織り込むべきことが明確になります。

こうした、指導改善を意識した具体的な記述は、実態に即した計画の策定、自校に求められる指導の工夫に貴重な示唆を与えてくれます。

1 現代社会における表現方法の広がり

文字表現は音声や映像・画像との組み合わせによって、より多彩な表現が可能になった。しかもデジタルのstuhl・ビデオカメラの進歩により、個人が手軽に楽しめるようになってきている。

生徒たちの言語生活の変化も著しい。彼らの好む音楽は、ことばと音ばかりでなく映像も重要な要素になっている。彼らはコンピュータ・ゲームでだって、よりリアルな映像や作曲家による本格的なBGMを楽しみながら、なまじな小説などよりも複雑な物語世界に熱中している。このような変化に対して、それでも文字でしか表現し得ないものがあるのだろうか？と疑問を抱く。

文字によって構成された世界でしか語り得ないことは実はほんの一握りしかなくて、もっと多くの手段で、私たちは自らの内なるもの、私たちを取り巻く世界のことについて、豊かな感受性をもって表し得ているのではないか。そして、そうであるならば、こうした

社会に生きる生徒たちが教室で向き合う学習材の世界は、本当に価値高いものなのであるのかと不安にもなる。

現代の文字・音・映像が融合された複合的な表現をどう「読むのか」という問題は、

メディア・リテラシーを形式的にとらえていたのでは解消できない根の深い問題とも結びついている。中学生をも対象とした商業戦略が横行するマスメディアの現状は、現代の表現を有益なものとして楽観視できないことを示唆している。

2 情報量の圧倒的な差異

文字だけで表現されている学習材は、絵や音のない分、情報は凝縮されており、理解するためのいわゆる「読む力」は高度なものが必要である、という考え方もある。

こうした考え方は、教室における「読みの授業」の必然性を支えているのかも知れない。しかし、やはり現代社会にお

教室で読む④



読むことの学習とさまざまな表現の可能性

松友一雄 福井大学



【まつとも かずお】国語学力の形成過程や定着のあり様を明らかにすることで、より効果的な国語学習を模索している。また教員研修のe-ラーニング化、対話型授業支援システムの開発を進めている。(URL : <http://www.lesis-k.com>)

ける複合的表現世界と、文字だけで表現されている学習材の世界との間には、提示される情報量に大きな格差があると考える。

複数の表現方法を効果的に重ね合わせるにより、相乗効果によって表現内容は増幅され、情報量は増大するのだ。

テレビ番組を見ながら話をする中学生たちの様子を観察してみるとよくわかることだが、授業における話し合いよりも圧倒的に多くの情報を操作しながら話し合いを展開している。これは、それぞれの話し合いの場に提示される情報量の格差を表しているのである。

それゆえに、これからの教科書は、提示する情報量をどう増やしていくかという課題に取り組まなければならない。私たちも、この新しい表現世界を読み解くための「読む力」をつける授業を構想していきたい。

3 現代の表現世界を「読む力」

ここまで述べてきたような現代の表現世界を読み解くために必要な力を私

りに整理すると、以下の三点に集約される。

現代の表現世界を読み解くために必要な「読む力」

- ① 複数の表現方法の組み合わせがもたらす表現の増幅効果に対する理解力。
- ② 膨大な情報を整理し、操作する力。
- ③ 対象を明確にした戦略的な表現に対する理解力。

そして、ここにあげた「読む力」を基礎として、複合的な表現世界を自ら構築していく力が育成されるのである。

プレゼンテーション能力が重視される昨今、大学でも講義を行うが、依然として文字言語表現に固執し、原稿を読むだけの表現活動しかできない学生も多い。やはりもっと早い段階から、文字・音・映像を融合した複雑な表現世界に向き合

い、理解する能力を育成していくことが重要であると考えられる。

4 資料を効果的に読む 説明文の授業 ―「クジラの飲み水」(1年)の場合

【現代の国語】には、一年生の説明文学習材として「クジラの飲み水」がある。この学習材には、図・写真、グラフによる資料がとても豊富に添えられている。

これまで説明文学習材では、文章の中の説明を補足したり、わかりやすくしたりする補完的な意味で資料が添えられていた。それに対して、この学習材では、視覚的なイメージを読み手に豊富に提供することで、表現されている内容をより効果的に伝えようという、積極的なねらいがある。

こういった表現手法は、プレゼンテーションでよく用いられる手法である。限られた時間の中で効果的に説明しようとする、目で見てすぐに理解できたり、話の展開に即して参照できる視覚的資料を効果的に用いることが必要となるからである。

文章に対して視覚的な資料を添えるこ

とで、同じ説明を繰り返すのではなく、説明したい内容をよりわかりやすくしたり、情報量を効果的に増やしたりすることが可能となる。

こういった効果に目を向け、視覚的な資料のはたらきを学ぶことで、より深い学習材理解が可能となるとともに、先にあげた「複数の表現方法の組み合わせがもたらす表現の増幅効果に対する理解力」も育まれるだろう。

そして、学習者自身が視覚的な資料を効果的に用いた表現ができるようになることを考える。

また、このような説明的な文章において、「簡単でわかりやすい表現」がいかに重要かということを実感することも大切である。この説明文も、資料を全く使わなければ、どれだけの分量の説明が必要となるか、またどの部分が表現できなくなってしまうかについても考えていきたい。

そうした実感をもつことで、視覚的資料の必要性が実感され、プレゼンテーション能力に最も重要なわかりやすさを追求する姿勢が形成されると考えられる。

新たな表現の

5 可能性にふれる

―「初天神」(1年)の場合

一年生の資料編に掲載した「初天神」は、近年話題になった落語絵本からの採録である。

もともと、落語という話芸を文章に直し、さらに絵を加えて絵本にするというアイデアの斬新さには驚きとおもしろさを感じる。こうした新しい表現形態が落語の入り口になってもいいのではないかと思う。

この学習材については、落語の語り口そのままの文体であることを考えれば、ぜひ音読に力を注ぎたい。やはりテンポと間合いは大切だし、複数の人物の特徴を理解して声色を使い分けながら読んでいきたいところだ。

私は先に、複合的な表現世界を理解する力として、「対象を明確にした戦略的な表現を理解する力」というものをあげた。商業主義に毒された宣伝や広告の戦略的な表現にはうんざりすることが多いが、一方で、落語の世界のように、お客を笑わせるという目的のために、ことは

を戦略的に用いている世界もあることを学習者に知ってほしいと願う。

ゆえに、この学習材を用いた学習の到達点を、書かれてある内容を深く理解することにおく必要はない。むしろ、話し方をうんと工夫することによって、聴いているものを笑わせることにおいてみたい。聴いている友達を笑わせるために学習を進めるなどという国語科の授業がかつてあっただろうか。おおいに教室で楽しみたい。

私たちは、急激な技術革新の中で、視覚的表現を中心に表現の可能性を飛躍的にひろげつつづけている。そしてこのことは、いわゆる理解の領域にも変革を起している。

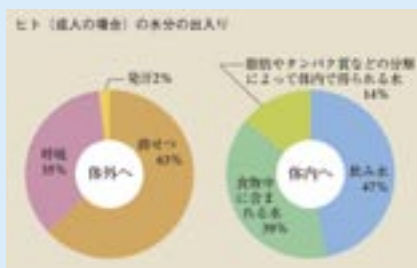
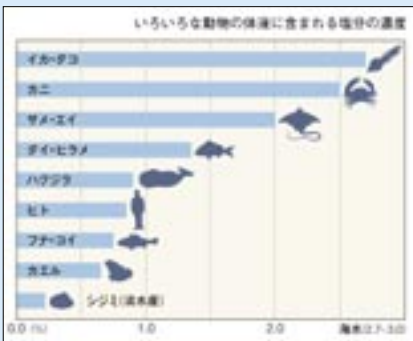
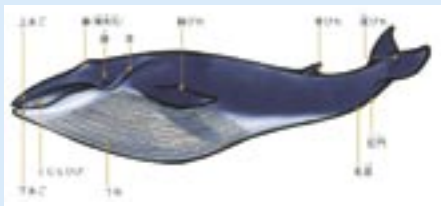
複雑な表現世界との関係を、必要性によって結ぶことも重要だが、遊びの道具としての楽しみもいっそう広がっていることをおさえておきたい。

それは、技術革新の陰で最もおもしろみを増したツールが「ことば」であると考えるからだ。



「クジラの飲み水」(1年)

図や写真、グラフなど豊富な視覚的資料が提示されている。今、「読むこと」の力は、文字からだけでなく、このような資料から供給される情報を読む力が必要となってきている。



「初天神」(1年)

落語の語り口そのものの文体は、テンポや間合い、声色などに工夫をして音読を楽しんでみたい。聴いている友達を笑わせるための学習ができればおもしろい。

ぼくも連れてって、
「ほうら来た、おまえがですぞうから、
見つかたじやないか」
「いじやない、連れてってたら」
「言葉に合うな、こいつはどへ行って、
あれ買つてくれ、こいつ買ってくれ、
うるさくてもしょうがないんだ」
「そんなことを言わないから、ちやん、連れて、
なんだかんだ言いつつたあけく、とうとう、
金持を連れて初天神に行くとはめになつてしまひ、
天満宮の境内には、おおぜいの人が出ていま
し、お祭りしたくうんでおりました。」

『現代の国語』においては、学習材一つ一つについて、画像を多数配したり、上に示すように説明文学習材にグラフなどの資料を入れるなど、より適切な情報を提供するさまざまな試みがなされている。また、三省堂の国語教科書ウェブサイト「ことばと学びの宇宙」(<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>)は、ここに構想する学びを適切にサポートする資料が整備されている。



松林の松葉は肥料に、枯れ枝や幹は燃料に、太い丸太は建材に使われた。また、松林は、風を防ぎ、地下水を蓄えるなど、重要な役割を果たす生活の基盤であった。



買い物で、触って物を確かめるときは、触り方に注意します。例えば花は葉から触ります。また、パンのように直接触れないものは、説明してもらいます。

「ユニバーサルな心を目指して」(1年)(右)と「松と杉」(3年)
『現代の国語』では、図版のキャプションも「読む」素材としてとらえられており、本文との関連を考慮した解説が付けられている。



メディア・ミックス

media mix [英] 複合情報媒体

メディア・ミックスはさまざまな情報媒体を統合して用いるプレゼンや舞踏、演劇、映画をはじめとした日常生活の中での統合的な情報の伝達・活用などの際に用いられる考え方である。似た考え方に「マルチメディア」があり、こちらは主にコンピュータ上で言語・音声・画像など他種類の情報媒体を用いるシステムにおいて使用される。また、写真や絵、テープやCD、コンピュータのプレゼンソフトなどを用いて行うスピーチやプレゼンについても、音声・文字・映像などの多種類の情報の組み合わせであることから、メディア・ミックスの視点を取り入れていくことが可能である。そうすることで、服装や動作、声の調子や話す速度など、発表者自身がそのまま情報媒体となるという意識が生まれ、プレゼンソフトだけに頼った表現から、メディア（発表者の雰囲気や状況も含む情報媒体）をどのように組み合わせ、効果的な発表や表現活動を行うかに視野がひろがる。演劇や映画の演出効果やテレビコマーシャルなどの分野では比較的進んでいることではあるが、今後学校においても、さまざまなパフォーマンスの構築と評価について、メディア・ミックスの視点を取り入れて再検討していく必要があるだろう。

もっと知りたいときは…

第2年次報告書
『試行としてのメディア
・ミックス教材の開発』
1990年
日本視聴覚教育協会

カタカナ語

4

ダイアログとは「対話」を意味し、カンバセーション（会話）とは異なる。会話は知り合い同士の、お互いの知っている事柄を前提としてなされるものであるのに対して、対話は片方にとって、ときには双方にとって知らない事柄についてなされるものであり、単なる「向かい合っている会話」ではない。自由に考えや思いを伝え合うことにより、自分と相手の思考のプロセスに注意を払いながら、相互理解と共通理解を見出し、協働を進めるためのコミュニケーションである。したがって、プレゼンテーションの際にテクニックを駆使してスピーチするだけであったり、会話を一方的に支配して自分に都合よく運んだりするやり方はあてはまらない。

もっと知りたいときは…

平田オリザ
『演劇入門』
1998年 講談社

つまり、ダイアログにおいては、自分の都合のよい解釈は許されず、どこまでも相手の文脈に寄り添うことが求められる。その意味では、ダイアログは「知らない」ということに対して開かれていて、話すことよりも相手の言うことを「聞くこと」に重点が置かれているともいえるだろう。ちなみに、対義語としてあげられるモノログ（独話）は他者を前にしていても自分だけで話している状態を意味し、相手が話した内容を自分の都合のよいように解釈してしまうことも含まれる。

ダイアログ

dialogue [英] 対話

ミッション

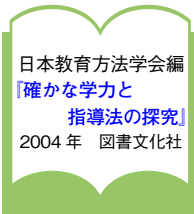
mission [英] 使命・役割

ミッションは、多く「ステートメント(宣言すること)」に結びついて表現される。企業の「ミッション・ステートメント」は、社会的な責任をはっきりと宣言することである。これが企業設立・運営の基本的なコンセプトになっていることが望ましい。つまり、何のためにその企業が必要なのか、社会において果たす役割は何なのか、何を提供できるのかなどが問われる。学校経営もP D C Aのマネジメントサイクルによる組織・運営が一般化しつつある。教育課程の編成・実施(教育活動のプロセス)、その結果としての学習者の変容の観点(教育活動の成果)、組織・設備面における観点(管理・運営のあり方)、さらに家庭・地域社会との連携や開かれた学校づくりの観点(地域の学校づくり)の中などで機能している。学校教育は、生徒の健全育成、能力や学力の開発を基本的なミッションとするが、組織としての学校を個別に検討するのであれば、その学校の存在意義として、使命や役割を学校独自の教育理念や方針、それを具現化した教育活動という形で明らかにする必要があるといえる。今後は、各学校が「ミッション・ステートメント」をどう位置づけていくのかが、問われることになるだろう。

もっと知りたいときは…



もっと知りたいときは…



コンピテンスは、そのまま訳せば「能力」ということになる。人は本来、さまざまな環境から情報を集め、それを自分なりに解釈・加工して、能動的に環境に働きかけ、環境を操作するものであり、そのような環境との関わりの中で「有能(コンピテント)」を追求しようとする。つまり、コンピテンスは、「効果的に環境と相互作用する能力」と言い換えることができる。これは単に、環境に適応することだけでなく、交渉の積み重ねの結果、それを変えていく行動であるため、周囲との関わりの中で育成する必要があるといえる。

学力ということを考えたとき、計測可能な学力(アビリティ)だけを「学力」とすることの不合理性から、コンピテンスの「相互交渉」という側面が注目されはじめた。対人関係能力や社会への自立的適応能力として、社会的能力や情緒面も含めた捉え方を「学力」をするのが適切であるという視点からである。「社会的コンピテンス」という言い方もされる。このことは、「学力」を個人内に閉じたものとみるのではなく、社会という関係性の中で捉えるべきことを示唆している。今後の学校教育においては、コンピテンスを視野に入れた「学力」観が重要になってくるだろう。

コンピテンス

competence [英] 能力・力量

情報ライブラリー

ちょっと
気になる

前から気になっていた、最近よく目にする、そんな「知りたい」カタカナ語をわかりやすく解説。もっと詳しく知るための文献もご紹介します。

平成18年度版
『現代の国語』
『現代の書写』
SNP
サポート・ネットワーク・プログラム
評価資料

平成十八年度版『現代の国語』

『現代の書写』では、学校現場で指導と評価の一体化を今まで以上に進められるよう、「年間学習指導・評価計画資料」を作成し、目標に準拠した年間指導計画例と評価規準例をご提案します。

この資料は、本年五月下旬に冊子として発行するとともに、三省堂国語教科書ウェブサイト「じゅぎょうの宇宙」(<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>)でも公開いたします。

「学習目標」

教科書の「この教科書で学びたいこと」にあたる。

学習材名	配当時間	「クジラの飲み水」の学習目標【学習指導要領の指導事項】	
クジラの飲み水	5 読む5	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物の体のふしぎさについて、関心を深める。 ・必要に応じて内容を要約して、表現や展開の工夫をとらえる。 【Cイ 内容把握や要約】 【Cウ 構成や展開】 【Cカ 情報の活用】	
	学習活動における具体的評価規準 (※「おおむね満足できると判断される」/B2)	評価方法	○A「十分満足できると判断される」状況と評価する際のキーワードとその具体的な姿の例 ☆C「努力を要すると判断される」生徒に対する指導の例
評価の観点	関心・意欲・態度 1 文章の展開に即して内容をとりえ、自分のものの見方や考え方を広くしようとしている。	記述の確認	○ 文章の展開に即して、事実と意見などを読み分け、構成や展開を正確にとらえ、内容を理解しようとしている。 ☆ 生き物の身体の不思議について思ったこと・考えたことを挙げさせる。
	読む能力 1 必要な情報を収集したり、比較したりする読み方を身に付けている。 2 文章の中心部分と付加的部分、事実と意見、問いと答えなどを読み分け、構成をとらえている。	記述の分析	○ 文章の書き出し、論の展開、説明の仕方など、筆者の工夫を的確に理解し、自分のものの見方、考え方を深めている。 ☆1 文章を読んでふしぎに思ったことについて、どういふ点がふしぎなのかを書き出させる。 ☆2 形式段落の始まりの言葉に注意して読ませる。
	言語についての知識理解技能 1 指示語や接続語およびこれらと同じようなはたらきを持つ語句を手がかりに、段落の役割や文と文との関係をとらえている。 【言エ 話や文章、文】 【言オ 単語】 【漢ア 漢字の読み】 【漢イ 漢字の書き】	記述の確認	○ 文章の論理的な構成や説明の仕方などの表現の工夫を理解している。 ☆ 形式段落の始まりの言葉を取り出して、そのはたらきを考えさせる。

※ 「関心・意欲・態度」の評価規準については、この学習材で育成すべき言語能力に合わせて設定するものである。ここでは学習指導要領の「2 内容」「C 読むこと」と「学習の重点目標」に基づいて設定している。

「評価の観点」

学習材の主領域の項目には、価値目標と技能目標をそれぞれ示している。

「評価方法」

評価をする際に指導者が見るポイントを示している。

「○」と「☆」

「○」はA規準を、「☆」はB規準を実現できない学習者への手当てを示している。

平成18年度版『現代の国語』

「年間学習指導・評価計画資料」 学習材の評価規準

平成18年度版『現代の国語』『現代の書写』評価資料の特長

- 『現代の国語』『現代の書写』の学習指導計画と評価に必要な資料は、「年間学習指導・評価計画資料」一冊ですべてカバーしています。
- 『現代の国語』では、
 - 本編のすべての学習材について評価規準を掲載しました。
(資料編は「読むこと」の学習材について掲載しました。)
 - 目標に準拠した評価をよりスムーズに進められるよう、「評価の観点」について、
 - 一学習材につき一つの領域にしばりました。
 - すべての学習材に、「関心・意欲・態度」と「言語についての知識・理解・技能」の評価規準を掲載しました。
『現代の書写』も、同様の観点で作成しました。
- 自己評価・相互評価用資料として、「学習者用評価資料(仮題)」を作成しました。

学習材名		思いや考えを深めたいこと	身につけたいことばの力	
クジラの飲み水 【教科書P.18～24】		生き物の体のふしぎさについて、関心を深める。	必要に応じて内容を要約して、表現や筋道の工夫をとらえる。	
評価の観点		B この学習の到達目標	評価	A より発展的な学習の到達目標の例 ◆目標に到達するための具体的な学習活動
	関心・意欲・態度	B 文章を読んで、クジラの生態について自分なりの考えをもつことができた。	発言の様子	A クジラ以外の生物について興味を持ち、それを知るために読書をする。 ◆ クジラの身体の作りについて不思議に思ったことや考えたことをあげよう。
	読む能力	B1 文章中にいくつか出てくる問いとそれに対する答えが、結論とどう関連しているかをとらえることができた。 B2 味のある事柄を探したり、今まで読んでいたことがある説明的な文と比べたりしながら読むことができた。	記述の内容	A 生物の生態について、問いかけとそれに対する答えという形式や文章の書き出しに気をつけて表現することができた。 ◆1 文章中に出てくる問いの答えがどこに書かれているか考えながら読もう。 ◆2 興味をひいた部分に線を引こう。
言語についての知識・理解・技能	B 指示語や接続語、文末の表現などに注意して読み、筋路の役割や文と文の関係をとらえることができた。	記述の内容	A 「第一に」「第二に」など筋路の書き出しのことに気をつけて文章を書くことができた。 ◆ P.24「学びの道しるべ」3をやろう。	

この教材で学んだことを書いてみよう。

組	番	氏名

「学習者用評価資料(仮題)」

学習者に対しても目標と評価規準を提示し、より確実な基礎・基本の定着をはかります。



体系は大事だが…

教育ジャーナリスト
矢内 忠

学習指導要領の見直しを検討している中央教育審議会教育課程部会の各教科等専門部会の議論には、時に違和感を感じるものがある。例えば算数・数学専門部会で複数の委員が、「数理の体系は美しい」とか「自分が学生時代、勉強していて、その美しさに感動した経験が忘れられない」といった趣旨の発言をしていた。

数学の体系は美しく、たとえ小学校の算数でも、その体系に則して教科内容を考えなくてはならないと、これまで考えられてきた。つまり、体系を保守することが優先されてきたのである。

しかし、どうなのだろう。その考え方が強すぎると、体系を理解できない子どもは悪い子で、人はみな数理の体系にひれ伏すべきだという議論になら

ないか。人間のほうがその体系内容に合わさねばならないのか。しかし、そうした教師の態度が多くの子どもを数学の楽しみから遠ざけてきたのではないか。

そうした系統主義的な価値観は、例えば道徳教育を検討する専門部会の議論にも垣間見える。「道徳教育をきちんとやれば、学校はよくなる」と元教科調査官の大学教授が述べた。道徳教育の「完成された体系」に子どもたちが合わせるようにすれば、すべてうまくいく、という発想だが、ではどうしてそれがこれまでできなかったのかが問題になるはずだ。

「個人」が膨張しすぎ、「自由」の袋小路にはまり込んでいるのが現代人だとして、では、人々の価値観を昔に後戻りさせれば問題は解決するのか。

数学の体系が美しいのは理解できる。それはそれで完成度を高め、革新を進めてほしいと思う。しかし、子ども向けに教材化する場合は、手立ての工夫が必要だろう。例えば、数学の教科教育研究の存在意義は、その辺りにあるはずであり、教育学部の教員が理学部の教員と同じような研究をしたって仕方がないと思うのだ。

編集後記



●自他のいのちやこころを尊重できるようなことばの力を育みたい、そんな願いをどう実現していくか、私たちは常に先生方との対話を通して考え続けています。本誌8号から続けてきました平成18年度版新教科書の特集号では、今の国語科を取り巻く四つの課題をテーマにして、新たなことばの学びを考えてまいりました。先生方には新しい『現代の国語』『現代の書写』を「こらんいただき、「ご意見やご感想をうかがえれば幸いです。」(太郎)

●お詫びと訂正

本誌9号におきまして、以下の誤記・誤植がございました。ここに、ご執筆いただいた安部朋世先生と読者のみなさまにお詫び申し上げます。P・10 上段 1行目 (編集部)

「一 暗記型学習からの脱却」

↓「一 暗記型学習からの脱却」

三省堂教育
ハイブリッドの学び 第11号

二〇〇五年五月三〇日発行

定価 一〇〇円 (本体九六円)

編集・発行人 八幡 統厚

〔発行所〕 株式会社 三省堂

〒一〇一八三七

東京都千代田区三崎町二一三二一四

TEL 〇三(三三三) 九四二七〔編集〕

振替 東京 〇〇一六〇一五五四三〇〇

〔印刷所〕 泰成印刷株式会社

東京都墨田区両国三一一二

[やない ただし] 1960年生まれ。國學院大學哲学科卒業。元日本教育新聞社記者。

読み語りの
出前 ④



「新しい修正点が見つかる」 著者との読み語り



後路好章

〔うしろ よしあき〕アリス館編集長。「街路樹ウォッチング」も趣味のひとつ。旅の先さきで、さまざまな街路樹を見つけて楽しんでいる。



「本をとおして子どもとつきあう」(宮川健郎著 日本標準)

210ミリ×148ミリ 1470円(税込み)

「読みきかせに始める 絵本から『サラダ記念日』まで」

(藤本英二著 久山社) 210ミリ×148ミリ 1553円(税込み)

「今、読みあげていいですか」
著者から原稿をいただいた
時、こういうと、ほとんどの
著者は、「えっ!」、一瞬驚い
た顔をなさる。

私の「読み語り」は、こう
して、著者を目の前にして始
まる。まずは、著者と私が、
耳と口を通して第一読者にな
るのだ。

優れた原稿は、まるで、何
回も読んでいたかのように、
すらすら読むことができる。
絵が絵本の形になって浮かん
でくる。著者と私の心がひび
きあって、じつに心地よいのである。

下絵の作品も初校ゲラも、著者と
「読み語りごっこ」をする。不思議な
もので、読むたびに新しい修正点
が見つかる。絵本ができあがったときに
は、文はほとんど暗記していること
になる。

昨年十一月、二冊の本が出た。
「本をとおして子どもとつきあう」
(宮川健郎著)と「読み聞かせに始ま
る 絵本から『サラダ記念日』まで」(藤
本英二著)である。二冊とも「読み聞

かせ」の本質を明快に解き明かした名
著である。

大学の先生でもある宮川氏は、
「声は、身体をつづき、いや、身体そ
のものだ。声によって読み聞かせると
き、そこには、読み手の身体性が立ち
あがってくる。声を受けとめる聞き手
も、身体性を際立たせて聞かなければ
ならない。そこには、身体と身体の内
まなましい関係が生まれる」と説き、
「私は、しばしば、絵本をかかえて教
室に行く」と語っている。

高校の先生でもある藤本氏は、
「読みきかせというのは『本の内容を
子どもの頭のなかへ移し替える』とい
う作業ではない。むしろ本をあいだに
はさんで、子どもといろいろお話をす
ることが大切なのではないか」とした
上で、「この関係性こそが、読みきかせ
のいのちなのだ」と言い切っている。

さて、アリス館編集室では、毎日、
絵本の「読み語りごっこ」をしている。
感動を共有することで、おたがいの信
頼感がより一層深まっていく。
「読み語り」によって生まれてくるも
のは、はかり知れなく大きいのである。

開幕! Next Stage へ



1994 年以來 10 年間、多くの方々とともに「対話する教科書」づくりをすすめてまいりました。さて、このたび新版(平成 18 年度版)教科書の発行にあたり、みなさまとの対話と交流をさらに深めるため、新たに『現代の国語』『現代の書写』Web ガイダンス」をスタートいたしました。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

第11号 特集 学びを生み出す「カリキュラム開発」と「評価」

新たなリテラシーにつながる ことばの学びをめざして

作者・筆者からみなさんへ
直筆メッセージポスター

作者・筆者からみなさんへ
音声メッセージ



平成18年度版「現代の国語」「現代の書写」
ポイントガイダンス



評価についての
考え方と
資料編活用の
アイデア

Triangle Column
トライアングル
コラム

教科書
フォーラム

教科書新時代 Webガイダンスは
SNPウェブサイト「ことばと学びの宇宙」からアクセス
<http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/>

テキストから
プログラムへ